

しらすをかしげなる童のさうぞくうるはしくしたるかうばしき物ふとおりくるまゝにいとゆふか何ぞと見ゆる薄き衣を中將君に打かけて袖を引たまふに我もいみじくもの心ぼそくて立とまるべきこゝちもせず云々と見えにたるこそ陽炎をしも絲ゆふとよべるはじめかとおぼゆればなりさてさし次は彼仲正の歌なりかればさきの絲木綿の説はよろしげにして宜しからず木綿は楮木の皮を麻の如くさきたるをいへりさればもし絲木綿とつりけて木綿見れば絲木綿といふ理り協はゞ麻をも絲麻といはるべきに似たれどしかよべる事ふつに亦いはれぬなるべしまた遊絲の遊の音訛などいふめるはいと拙くして云にたらねば絲結の義と決めたらむこそよからめさてかくしるしをへたるを大江章雄打見ていへらく絲ゆふは白河の御世より今すこし古く見えたりさるは和漢朗詠集雜部晴とある題の歌に霞はれみどりの空ものどけてあるかなきかにあそぶといふとあり但寛永の刊本にはあそぶといふとありと云へりかく云へるに驚きて一とせ古筆了伴より柳營に奉れりし公任大納言の眞蹟といふ本幸ひさきに比較して置しを取出て披き見るに其眞本も亦あそぶいとゆふとありてそれを墨もてけちたるかたへに同筆にてあそぶとり見ゆとあり按ふに諸本に遊ぶいと見ゆともあそぶ絲ゆふとも見ゆる事はあるかなきかにと云ふ四の句にひかれてふと書僻めしがひろまれるにはあらじかされば彼古鈔本にあそぶとり見ゆとあるかたもしかすがに捨がたく流布本のみには據がたければさのみの證ともいひがたかるべし

〔萬葉集一雜歌〕輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌

東野炎立所見而反見爲者月西渡

〔萬葉集二挽歌〕柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌○中略

蜻火之燎流荒野爾白妙之天領巾隱○下略

〔萬葉集十春雜歌〕詠鳥